講　演　『心（むすめ）が教えてくれた大切なこと。
～支援によって生かされた私たち家族～』

講　演　者：清水誠一郎さん　犯罪被害者ご家族（父）

コーディネーター：和氣みち子さん　被害者支援センターとちぎ事務局長、全国被害者支援ネットワーク理事、栃木県人権施策推進審議会委員、交通犯罪被害者遺族

〈コーディネーター和氣さん〉熊本の清水誠一郎様は2011（平成23）年3月3日、当時3歳だった最愛の娘、心（ここ）ちゃんを小児性愛の20歳の男に殺害された犯罪被害者家族です。被害者参加制度により裁判に参加したのがきっかけとなり、娘の理不尽な死と向き合い、悲しみ、苦しみと葛藤しながら命の大切さをたくさんの人に訴えるため、各地で講演活動を行っておられます。清水様のお話をお聞きいただき、その心情や被害者が置かれた現状に深く思いを馳せ、心のこもった支援活動につなげていただきたく思います。

スキップでトイレに向かったのに…

清水さんは妻、真夕さんとともに登壇し「言葉が詰まったり涙が出たりすることもあると思いますが、これも被害者の姿だと思ってお聞き願えれば」と語り始めた。

心ちゃんへの思いを話す清水さん

被害に遭った心ちゃんは、清水さん一家の末っ子として生まれ、すくすくと育った。その日、2011年3月3日はひな祭りで、帰宅した清水さんは真夕さんと心ちゃんと一緒に近くのスーパーへ出かけた。レジを終えた時、心ちゃんは「パパ、トイレに行かせて」と、一人でトイレに向かった。とてもにこやかにスキップしながら15メートルほど先の角を曲がったのが、心ちゃんを見た最後だった。後を追ってトイレに着いた両親が女性トイレ、男性トイレと探したが見当たらず、身体障害者用トイレをノックすると、男性の声で「今使用しています」と返事があった。「まさかそこに娘がいるなどと考えつきませんでした」。

警察に届け自宅で待機したが、何の連絡もなかった。肌寒い夜。「せめて娘を暖かい場所で寝させてくれ」と願った。長い夜が明けて間もなく、真夕さんが突然泣き出した。携帯電話のテロップに「3歳女児、遺体で発見」という文字。家にいた警察官に問いただすと、一度離れて戻ってきて「大変申し訳ありませんが、心ちゃんを助ける事ができませんでした」と告げた。「どういうことですか」と詰め寄る清水さんに「今から署へご同行願います」との言葉が返ってきた。

家族みんなで娘のところへ…

「今でもどうやって警察に行ったのか、記憶がありません」。警察ではもっと苦しいことが待っていた。心ちゃんの遺体の確認だった。警察官が緑色のシートをめくると「大切な娘が静かに眠ったままでした」。両親は抱き締めようとするが、警察官に制止されたうえ、追い打ちの言葉を聞かされる。「今から解剖します」と。「何も分からず、誰か分からない者に殺害された娘をまた切り刻むんですか。解剖という言葉がそういう風にしか聞こえませんでした」と清水さんは言葉を詰まらせた。

1日後、やっと家に帰ってきた心ちゃん。「なぜあの時、娘を一人でトイレにやったのか」と清水さんは今も自分を恨み、責め続けている。「私が娘を犯人に引き渡した。世の中に、まして自分たちの近くに犯人のような人間がいるなんて考えたこともありませんでした」。犯人は5時間ほどスーパーで女の子を物色していたと聞かされた。

心ちゃんを失った清水さんと真夕さんが決断したのは「家族みんなで心のところへ行こう」だった。「たった3歳の娘を一人でやらせるわけにはいかない」と。「そこで私たちの人生は一度は終わりました」。

支援センターと警察のおかげで…

清水さんは「今こうやって生きているのは、私たちを支え、助け、励ましてくださっている（くまもと被害者支援センターの）支援員の方々のおかげ」と振り返る。「あの時、生きていく必要がない私たちには人を信じる気持ちは少しもなく、支援員の方が来られた時も、何をしに来られたのか、それさえ分かりませんでした。それなのに、何を言われようと必死に私たちを助けてくれました」。被害者参加制度で裁判に参加し、犯人と向きあって闘った清水さん。「何もかも初めての経験でしたが、それを一から支えてくださった」。心療内科、検察庁、裁判所への毎回の付き添い。「すべてにおいて私たちに寄り添っていただきました」。

それでも、心のところへ行こう、逃げ出したいという気持ちにたびたび引き戻された。真夕さんは何度も家を飛び出し、心ちゃんのそばに行こうとした。「そんな妻を心療内科に連れて行っていただき、今こうやって横にいるのは、支援員の方々のおかげです」。もう一つの支えが警察官。最後まで見つからなかった心ちゃんの靴を川に入って見つけてくれた。

「犯罪のない世に」。講演で恩返しを…

心ちゃんを失って6年近く経った今も「苦しみが癒える事はなく、気持ちは何一つ変わりません。癒える方法があるとすれば、それは娘に会いに行くこと。しかし、今はまだ娘に会うことはできない。私たちを助け、励ましてくれた支援センターや警察官ら多くの方々に恩返しをしたいからです」。

全国で苦しんでいる被害者に同じ被害者として手を差しのべたい。「一緒に力を合わせて犯罪を少しでも減らし、犯罪に遭った者が生きていける世の中にしなければ」。そんな思いで取り組んでいるのが、講演活動だ。「どうか、皆様のお力をお貸しいただき、いろんな場所でお話しする機会をください」と訴えて締めくくった。最後に心ちゃんの思い出があふれるＤＶＤが上映され、愛らしい仕草や表情が会場の涙を誘った。

妻 真夕さんと一緒にご登壇いただきました

〈和氣さんのコメント〉清水様の勇気ある行動には心ちゃんの命を無駄にしたくない、安全安心な社会を実現したい、との願いが込められているのではないでしょうか。犯罪被害者になってしまうと、残念ながら被害者をやめることができません。それは大変辛いことです。本日出席の方々は、会場に来ていない人々に犯罪被害者支援の重要性、必要性を伝え、理解していただけるようご協力をお願いします。

発行：公益社団法人全国被害者支援ネットワーク